

ISSN 0910-2396

野鳥だより

—北海道—

北海道野鳥だより第145号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成18年9月21日

タンチョウ



2004. 1. 3 阿寒町

撮影者 笹森 繁明 (札幌市西区)



も く じ

「私の探鳥地」連載50回を重ねて
 代表幹事 白澤 昌彦 2
 保護した鳥達が教えてくれたこと(2)
 礼文島 レブンクル自然館 宮本誠一郎 4
 鳥好きの文学散歩7 稲見一良「ダック・コール」
 札幌市手稲区 高橋 良直 6
 コクガンが野付湾で越冬している
 中標津町 中田千佳夫 7
 探鳥会ほうこく 12
 [閑話] 野鳥あれこれ
 カタカナで聞く鳥の声 広報部 15
 探鳥会あんない 16
 鳥民だより 16

「私の探鳥地」連載50回を重ねて

代表幹事 白澤 昌彦

「野鳥だより」の表紙の裏に掲載されている「私の探鳥地」は第143号で50回を重ねました。掲載開始当時を思い出しながら当時のことを振り返ってみたいと思います。

私は、昭和53年(1978年)に本会の幹事に初めて就任しており、担当は「編集」でした。第32号(昭和53年6月号)は、私が初めて記事の割り付け、写真の配置等の編集全体を任されたものであり、何度も予定ページ内にきちんと収まるよう組み直しをした思い出深い記念の号です。

「私の探鳥地」の連載を始める昭和60年(1985年)当時から編集担当幹事をしておりました。これを始めた経緯ですが、実はこれと似た企画で「探鳥地案内」というものが、第29号(昭和52年9月号)から始められております。これを見ますとタイトルが「北海道探鳥地案内-鳥を探しに行きましょう」とあり、本会で開催している探鳥地をはじめ、道内の有名な探鳥地を紹介する企画であったようです。この企画は、28回掲載され、昭和60年の59号まで続いており、北は稚内から南は津軽海峡のコクガンなど広く紹介されております。この中には現在の定例探鳥会の開催場所12箇所中9箇所も案内されております。

28回の連載で主な探鳥地がかなり出ていたこともあり、次の企画として、マイナーな場所ではありながら、日頃から会員が見ている自分のフィールドを紹介していくことにより、更に様々な探鳥地が出てくることを期待し、「私の探鳥地」として連載していくことを編集会議で決めました。そして、第1回目を第60号に、私が「円山」と題し投稿しましたが、それ以来、いろいろな方々に投稿をいただき、現在に至っていることを嬉しく思っております。

これまでの投稿内容(表1)を見ますと、やはり会員が

一番多く集まっている札幌市内が16回紹介されております。市域内の面積が広いだけに、多様な自然環境がそれぞれの地域に存在し、そこにいろいろな種類の鳥たちが棲息していることが伺われます。この大都市の中にあっても、いろいろな環境に見合った鳥たちを楽しめることは素晴らしいことだと思っています。

次いで多いのが札幌の周辺の石狩市、江別市、千歳市、苫小牧市、小樽市、岩見沢市などで、それぞれ2~3回紹介されています。

札幌市内に住んでいる者にとっては、遠隔地の鳥たちに非常に興味があるのではないのでしょうか。札幌市内では見ることが出来ない鳥たちも、遠く離れた所にはきっと素晴らしい自然が残っており、その環境に見合った鳥たちを見ることが出来るとつい思い込んでしまいます。そんな希望を叶えてくれるような記事として、道北部では礼文島や稚内市があり、道南部では知内町、砂原町、厚沢部町が掲載されています。これらの遠隔地の鳥情報は現に見ている人の生の情報ですから、鳥見の旅などには大変役立つものと考えています。

私は、道東方面は野鳥の宝庫と自分勝手に考えていますが、残念ながら帯広市内の紹介以外はこれまで掲載されていません。道東にお住まいの会員の方、是非ご紹介していただければ大変ありがたいと思っております。

北海道内には、私どもが知らない素晴らしい鳥見の場所がまだまだあるのではないかと考えており、この企画が更に続いて道内の情報がたくさん集まることを期待しております。

表1 「私の探鳥地」 1～50

	年	号	探鳥地(タイトル)	場所	執筆者
1	1985	60	円山	札幌市中央区	白澤 昌彦
2	1985	61	千歳	千歳市	道川富美子
3	1985	62	長流川	伊達市	福岡 研也
4	1986	63	名寄公園	名寄市	松本 光二
5	1986	64	石狩浜、わが家をブラインドにして	石狩市	黒田 晶子
6	1986	65	豊滝から砥山ダムまで	札幌市南区	塚原 英代
7	1986	66	美唄泥炭地試験場	美唄市	田辺 至
8	1987	67	神楽岡公園	旭川市	富川 徹
9	1988	71	北大苫小牧演習林	苫小牧市	竹内 強
10	1988	74	豊平公園緑のセンター	札幌市豊平区	戸津以知子
11	1989	76	知内川下流	知内町(渡島)	見延 誠一
12	1989	77	千歳市街地	千歳市	遠藤 茂
13	1989	78	茨戸(湖)川周辺	石狩市	泉 勝統
14	1990	79	厚沢部町土橋自然教育林	厚沢部町(檜山)	林 吉彦
15	1990	82	屯田防風林と創成川	札幌市北区	矢野 玲子
16	1991	83	ノスリが渡ってきた -砂崎海岸にて-	砂原町(渡島)	石谷 義一
17	1991	84	栗山町「御大師山」	栗山町(空知)	中井 惶
18	1991	85	えりも岬付近	えりも町(日高)	井上 公雄
*			(欠)		
20	1992	87	余市川	余市町(後志)	赤石 誠二
*	1992	88	野幌森林公園 久しぶりの早春探鳥会	江別市	芹沢 裕二
22	1992	89	恵庭	恵庭市	富田 寿一
23	1992	90	札幌市福井周辺	札幌市西区	渋谷 弘子
24	1993	92	藻岩山	札幌市南区	山本 一
25	1994	95	我がフィールドにて(十勝川)	帯広市	土田 光子
26	1994	96	新川河口	小樽市	野坂 英三
27	1994	97	口無沼(クチナシヌマ)	苫小牧市	佐藤 正秀
28	1994	98	モエレ沼	札幌市東区	栗林 宏三
29	1995	99	岩見沢公園・市民の森	岩見沢市	若林 信男
30	1995	101	余市川 -ハヤブサの水浴び-	余市町(後志)	神田 健男
31	1995	102	都市近郊の森と水辺 -西岡水源池-	札幌市豊平区	山田 三夫
32	1996	104	厚沢部【土橋自然教育林】	厚沢部町(檜山)	道川富美子
33	1997	108	北海道大学苫小牧演習林	苫小牧市	木村 与吉
34	1998	114	冬の石狩湾新港	石狩市	樋口 陽子
35	1999	115	冬こそ道北!	稚内市	疋田 英子
36	1999	118	笹流れダム周辺	函館市	鈴木 実
37	2000	120	礼文島に翼を休める鳥たち(春の久種湖)	礼文町(宗谷)	道場 好
38	2000	122	北村幌達布	北村(空知)	佐藤 幸典
39	2001	124	百合が原公園	札幌市北区	道場 優
40	2001	125	砥石山登山道・八垂別の滝コース	札幌市南区	白澤 昌彦
41	2001	126	「豊平川」ミュンヘン大橋からJR苗穂鉄橋まで	札幌市豊平区	戸津 高保
42	2002	127	十五島公園	札幌市南区	小堀 煌治
43	2002	128	円山周辺	札幌市中央区	武沢 和義
44	2002	130	王子ワッカナイ水源池	苫小牧市	成澤 里美
45	2003	131	モエレ沼公園と中沼町	札幌市東区	片山 實・慶子
46	2003	133	札幌市北区あいの里地区とその周辺	札幌市北区	岩崎 孝博
47	2003	134	利根別原生林	岩見沢市	佐藤 幸典
48	2004	136	平岡公園	札幌市清田区	川東保憲・知子
49	2004	138	野幌周辺	江別市	松原 寛直
50	2006	143	小樽市銭函	小樽市	高橋 良直

保護した鳥達が教えてくれたこと(2)

礼文島 レブンクル自然館 宮本 誠一郎

前回に引き続き、この10年間に我が家に届いた鳥たちの、印象的な話を掲載させていただきます。(野鳥だより第144号をご参照下さい。)

5. 海を渡るフクロウたち

千葉県で生まれ育った私にはフクロウの仲間は深い森に棲む印象がありました。子供の頃は家の周りの木の梢に休む姿をとときどき見かけました。あの頃見たのはどのフクロウだったのか記憶が定かではありませんが、礼文島に来て初めて出会ったフクロウは利尻島で標識調査の網にかかったものを野鳥の会の小杉氏に見せていただいたコノハズクでした。それは両手の平にすっぽりと包まれてしまうほど小さな、黄色い目をしたフクロウという印象でした。1998年春、我が家に初めて小さなフクロウが保護され届きました。カラスに追われ小屋の陰にいたそうです。外傷はないようでしたが腹がへっていたようで練り餌を口にやると食べました。飛べそうなので写真を撮り、晴れた晩に森に放鳥しました。放鳥するまでコノハズクだと思っていたのですが赤い目が印象に残り、後からフィールドガイドで確認するとオオコノハズクでした。オオコノハズクも小さいことに改めて感心し、記録写真を撮って良かったとほっと胸を撫で下ろしました。その後オオコノハズクは1999年春には落鳥個体が、2000年秋には再び生体が保護されました。このほかにもコノハズクが1回、コミミズクが2回保護され、トラフズクが2回落鳥で確認されました。エゾフクロウやシロフクロウの目視確認もされています。これらのフクロウたちは礼文島で一年間過ごしているわけではなく、

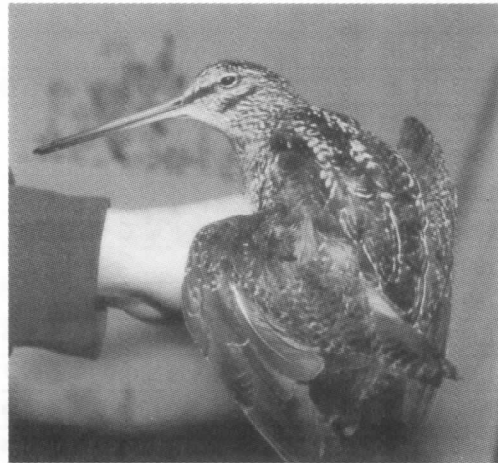


オオコノハズク

わざわざ海を渡って移動しているのです。昔、海馬島に住んでいた漁師に聞くと春先の夕方、渡ってきたフクロウをよく捕まえたそうです。フクロウたちも日本とサハリンを行き来しているのでしょうか。森の神が海を渡ることに感心させられました。

6. ヤマシギとアオシギ、鴨千鳥の見分けは難しい

何年見続けていても未だにシギには自信がありません。今までにキアシシギ、ヤマシギ、アオシギ、メダイチドリが我が家に届いています。最初に届いたのはキアシシギで島では毎年観察される鳥で割合識別は判りやすいほうです。98年11月にヤマシギが届いたときは手に持って重量感があ



アオシギ

り、大きさからも間違いないと確信いたしました。2000年4月、動けなくなった鳥が玄関前にいると娘の同級生の親から連絡をもらい、行ってみるとシギがたたずんでいました。手でつかんでも逆らわないので、我が家に持ち帰りスポーツドリンクをのどに流し込み、暖かいところで一晩寝かせました。すると翌朝には多少動きが良くなったので晩に森に放しに行ったのですが、外気が寒いせいかしばらく待っても動きません。また家に持ち帰りましたが、翌朝には落鳥してしまいました。「ヤマシギ」と記録して利尻に送り、野鳥の会の小杉氏に見てもらおうと「アオシギ」と回答をもらいました。改めて図鑑と写真を比べてみて、礼文島の初記録が増えました。また、97年の8月に落鳥して水に濡れた鳥を「ミユビシギ」と記録して、利尻町立博物館に送ったところ、その後の標本製作の際にメダイチドリだったと訂正をいただきました。シギ・チドリの判別の難しさを実感させられました。

7. カモメも記録が大切

礼文島ではオオセグロカモメ、セグロカモメ、ワシカモメ、シロカモメ、ウミネコ、カモメ、ミツユビカモメ、ユリカモメの8種類を確認しています。保護することが多いのは夏に島で繁殖するオオセグロカモメとウミネコがほとんどです。若鳥が道ばたで交通事故や海岸で自然死するものも多数あるため、記録していないものがほとんどです。さすがに1日何件も電話があると、「カモメとカラスは適当に処理して下さい」と言いたくなります。でも時にはミツユビカモメやシロカモメ、ワシカモメの落鳥個体だったり、足輪がついた個体の場合もあります。97年10月には林の傍でカラスに襲われているカモメが保護されました。最初は「またカモメか」としかたなく受け取りに行ってみると、足が黒く短いミツユビカモメでした。春と秋の渡り時期にだけ大群で島の周辺海域で見られます。海岸で見るとウミネコと比べてもかなり小さいのですが、手に持つと羽



ミツユビカモメ

が長いので大きく感じました。海岸で姿は見えてもまじかに見る機会はめったにありません。写真を撮り翌日海に放鳥しました。ミツユビカモメは10年間で1回限りでした。2003年4月には外傷が無く、自然死と思われる足輪付きのオオセグロカモメの落鳥個体が見つかりました。足輪は損傷が激しく一部読めなくなっていたが、山階鳥類研究所に送ると10年前に道内で付けられた足輪と判明しました。また同年9月には天売島でウイングタグをつけた個体も死体で見つかりました。こんなことからカモメの死体だからと言って放置しておく、貴重な記録が失われることにもなりかねないと知らされました。

8. 保護されるウソとシメ

島で繁殖して、普段からよく見る、または声を聞く小鳥と言えば、ハクセキレイ、ノゴマ、アオジ、コマドリ、ミソサザイ、ウグイス、ウソ、ヒガラ、エゾセンニュウ、シマセンニュウなどです。でも保護されたり死体が見つかる鳥で多いのはウグイス、ウソ、ミヤマホオジロ、アオジ、

キクイタダキ、シメの順になっています。意外に多いのはミヤマホオジロとシメです。ミヤマホオジロは3月初めの早い時期に多数渡ってきて5月末には見なくなります。シメは春の渡り時期の短い期間にわずかに見られるだけの鳥



シメ

ですが、今回記録を調べてみると今までに5回、2年に1回の割合で保護されています。またウソは島では一年中見られる鳥で、保護数もミヤマホオジロに次いで2番目です。いつも見ていて保護の多い鳥と、普段見たことがないのに度々保護する鳥、どのような関係があるのか、今後記録を積み重ねて調べていくと面白いと思います。

9. 保護した猛禽ツミ

天然記念物のオオワシやオジロワシは保護したら環境害に送られますが、それ以外の猛禽たちで保護したことがあるのはハヤブサ、チョウゲンボウ、ハイタカ、ツミなどです。ツミはその中でも3回保護、1回落鳥個体を確認しています。保護された状況を見ると小鳥などを襲おうとしてガラスに激突している様子です。狩られる側のミヤマホオジロなども猛禽などから逃げてガラスに激突するケースが多数目撃されています。これらの激突した鳥を狙って、待



ツミ

機しているカラスも鳥では見られます。ハイタカは肩骨が折れた状態で保護されたので羽を切り落として手当てしました。鶏のささ身を与えて育てましたが、片羽でも床から1メートルほどの窓の傍に飛び上がり、外の景色を眺めていました。お気に入りの場所で、ある日突然落鳥しました。猛禽らしい凄みと気迫のただよう鳥で、我が家には一番長くいた猛禽でした。

10. 青い鳥、黄色い鳥がいっぱい

2004年4月下旬はオオルリ、キビタキがたくさん来た年でした。いつもの散歩道で普通に青い鳥、黄色い鳥がいっぱい目について、あちらでもこちらでも「青い鳥見たよ、なんて言う鳥?」「背中が黒くておなかの黄色い鳥みたよ」と声をかけられました。我が家にもオオルリが3体、キビタキが2体、きれいな落鳥個体が届けられました。毎年きている鳥ですが、この年は特に群れの規模が多かったようでした。季節の変わり目で寒波にあたった小鳥は我が家に

届いた以外にも相当数落鳥したと思われます。この年の春の野鳥観察会には、この美しい鳥たちの華麗な遺体にも参加してもらい、参加者に間近に見ていただきました。



オオルリ

鳥好きの文学散歩 7

稲見一良 「ダック・コール」

札幌市手稲区 高橋良直

稲見一良「ダック・コール」(ハヤカワ文庫所収)は、6編の短編小説からなる連作もので、全編に色々な野鳥が登場し、楽しませてくれる珍しい現代小説である。映画撮影中に突然目の前に現れたシベリアオオハシシギにカメラを向けてしまい、仕事を台無しにしてしまうカメラマンの話や、南洋の海でカメとグンカンドリに助けられる漁師の話など、鳥と人との様々な出会いが語られる。舞台は現代の日本であったり、19世紀のアメリカであったりと様々で、作風もハードボイルド風の追跡劇や童話風の物語など色々な趣向がこらされている。共通していることは、どの話にも野鳥が登場し、生き生きと描かれること、主人公がいずれも世俗に背を向けた、孤独な影のある男たちであることだろう。

作者の稲見一良という人はあまり知られていないように思うが、1931年大阪府生れ、晩年になって作家活動を始め、3冊ほどの著書を発表して1994年に亡くなっている。

この小説は1991年に刊行され、第4回山本周五郎賞を受賞したものというが、バードウォッチャーの世界ではあまり話題にならなかったようだ。作者自身に狩猟趣味があって「狩猟小説」ともいうべき趣が感じられる部分があることや、第3話「密漁志願」で探鳥会御一行の様子が皮肉な眼で描写されることなどが一部のバードウォッチャーに嫌われたのかもしれない。また、この第3話ではパチンコでキジバトを撃ち落とすというぶっそうな話が出てくるのだが、

私はこれを読んでいてさほど不快には感じなかった。それは、作者のまなざしに鳥に対する深く、あたたかな愛惜の情が感じられることによると思われるが、さらには作者の視点が現代の世相やひいては現代文明に対する批判を基調にしていることが感じられるからだろう。

探鳥会の様子が皮肉な眼で描かれる部分があると書いたが、この部分はいささか気になる場所である。作中で主人公は隊列を組んだ一団が川沿いの小道をやってくるのに出会う。これは何だ。「討ち入りの赤穂義士かと思うほど、ものものしい集団」が一様に土や草の色の衣服を着て、カメラやスコープをつけた三脚を担いでいる。作者の目には探鳥会の隊列が異様な集団と映るのだが、これはこの作者だけの見方ではなく、ごく一般の人からも探鳥会のグループというのは時に異様なものに見えるのではないだろうか。野幌森林公園やウトナイ湖といった場所では、周囲の人に違和感を与えることはなさそうだが、例えば鶴川河口の探鳥会で、多数の人が三脚にのせたスコープを担いで国道を横断する様子というのは、知らない人からは異様な、特殊な集団に見えるだろう。野鳥愛護会の会員は皆ごく常識的な社会人や主婦だと思うが、時として特殊な、近寄りやすい集団という印象を与えてはいないだろうか。いささか余談になったが、このようなことを考えさせてくれた小説でもあった。

コクガンが野付湾で越冬している

中標津町 中 田 千佳夫

はじめに

コクガンが野付湾に10月末から11月頃に渡ってきて、その後消えてしまうことは以前から聞いていました。同時期、風蓮湖でも観察され、両地区とも渡りの中継地として認識されていました(雁を保護する会 1994)。

野付半島を歩くことが大好きな僕は、ただ鳥や植物が楽しめればいいオッサンでしたが、せめてコクガンの大群を一度だけでも観てみたいと思っていました。素人の僕は10月から11月にかけて湾内を探せば、3,500羽の群れだから簡単に見つけられるものと甘く考えていました。しかし、行くたびにを見つけ出せませんでした。

ところが2004年12月12日、野付半島の最先端の砂嘴に挟まれた浅瀬の水面に600羽+のコクガンの群れに出会ったのです。のんびりと休んでいました。その数の多さにびっくりしました。僕的にはとっくにいなくなっている時期だったので「まだこんなに残っている。すごいぞ。」という印象でした。

コクガンの越冬地として知られる函館付近海域、大湊湾(青森県)、北三陸海岸(青森県八戸市)、下北半島北岸(青森県下北郡)、陸奥湾南部(青森市)、南三陸海岸(宮城県本吉郡)、蒲生海岸(宮城県仙台市)などでは、12月から3月の期間、常棲していることが確認されています(雁を保護する会 1994)。となれば、野付湾でも越冬しているかもしれない。これを確かめるには通うしかない。そ

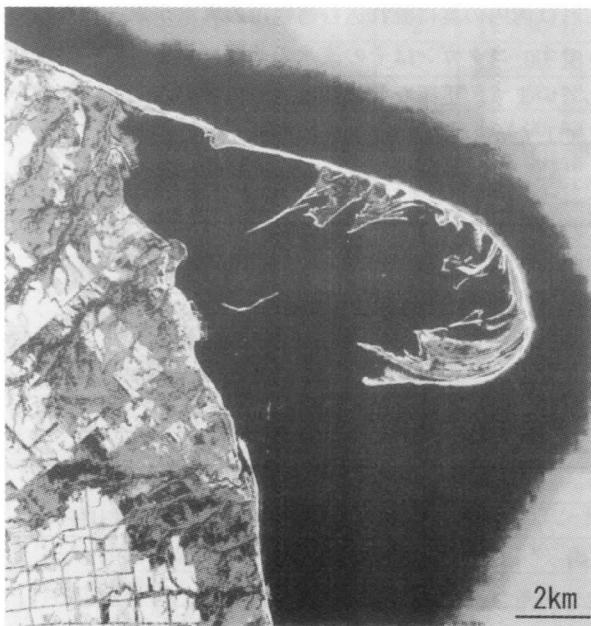


図1 野付半島と野付湾

れからほぼ毎週通いました。

野付湾は北海道東部の標津町と別海町(根室管内)にまたがる野付半島に囲まれた湾です。野付半島は平仮名の「つ」の字に似た形をして、付け根から先端まで26kmもあります(図1)。複合砂嘴あるいは分岐砂嘴と呼ばれる地形をしています。沖に向かって伸びる砂嘴が繰り返して形成され、内側に数多く分岐した凸凹ができたものを分岐砂嘴といいます。内側の海は浅く、アマモがびっしり生えた藻場になっています。



湾内に降りたコクガン 05. 12. 23 岩井直樹氏撮影

ホッカイシマエビをはじめカレイ、ニシン、コマイといった数多くの魚たちの産卵場や小魚たちの生育場になっています。秋から春に利用するガン・カモ類にとり餌場と休息場としてとても魅力的な場所と言えます。

僕ははじめて確認した野付湾を中心観察地としました。観察をしていくうちにトドワラとナラワラのポイントが重要なことに気づき追加しました。

コクガンは同季節に見られるカモ類(ヒドリガモ、オナガガモ、スズガモ、コオリガモ、クロガモ、ビロードキンクロ、ウミアイサ)やウミウ、ヒメウに比べ一回り大きく、飛び方や編隊形で区別しやすい。識別と個体数は双眼鏡(ニコン8×)とフィールドスコープを使用しました。2kmまで確認は可能でした。

観察期間は2004年12月12日から2006年5月7日まで。観察日数は60日。観察時間、観察ポイント、天候、風力、コクガンの観察数を記録しました(表1)。

コクガンの湾内および付近の利用域とその時節的变化

足掛け3年の観察からコクガンが利用している場所はおおまかに8ヶ所に区分することができました。

- 1 : トドワラの東側
- 2 : トドワラの西側
- 3 : 竜神湾
- 4 : ナラワラ付近
- 5 : 野付湾東域
- 6 : 野付湾西域
- 7 : 野付崎
- 8 : 野付崎の沖(図2)

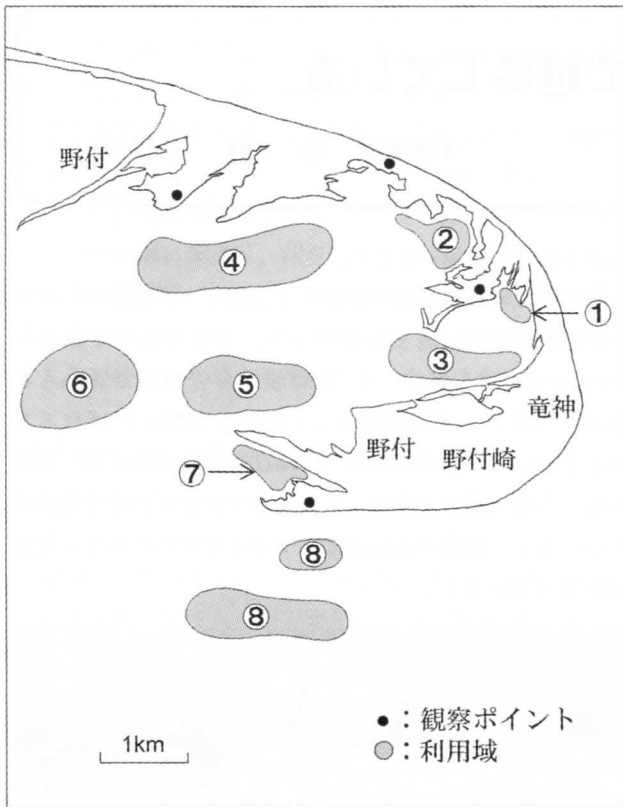


図2 コクガンの10-5月の利用域と観察ポイント

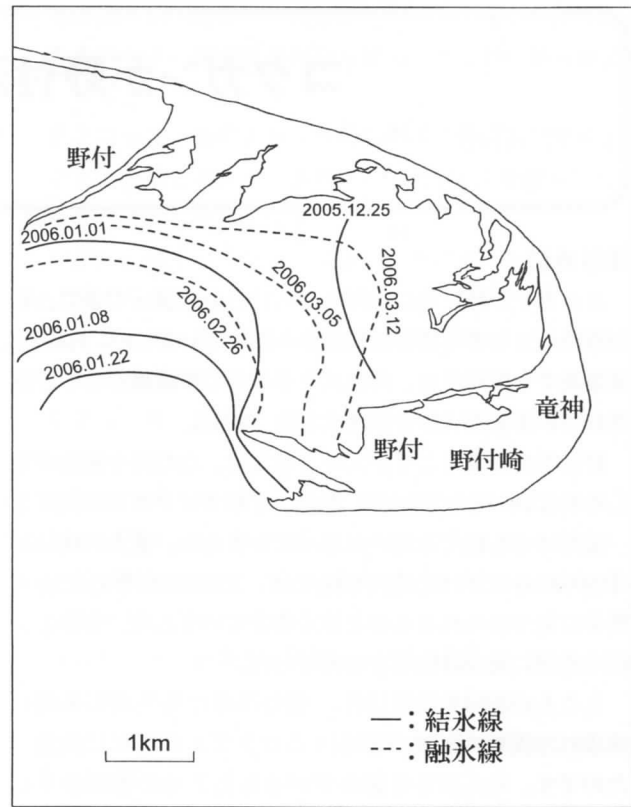


図3 野付湾の結氷と融氷の進行状況

10月から5月の越冬期間中に気候の変化に対応してコクガンは利用域を変えていました。

【10月から12月】2005年10月10日に20+羽を初確認したのは⑦の野付崎先端の砂嘴に囲まれた浅瀬でした。10月16日に1,289羽以上の群れが来たときは③の竜神湾と⑤の野付湾東域と⑦の野付崎で観察されました。その後12月下旬までは野付崎と竜神湾にいました。10月30日と11月3日にはほとんどいなくなりました。これは10月25日から鹿猟と鴨猟が解禁された影響があるようです。また強風が吹いた12月4日は1,336羽がトドワラ付近に集まっていました。

12月下旬になると気温が下がり湾内に氷が張り出します。それに伴い竜神湾から野付湾東域に移動してきていました。

一部は⑧の野付崎の沖に集まっていました。

湾内の氷結は年によって差がありますが、12月25日過ぎから始まります。2005年、2006年とも1月1日には、湾内の2分の1の海面が氷りました(図3)。

【1月から2月中旬】1月10日までには湾内の3分の2以上、野付崎から尾岱沼港を結ぶ弓状のラインまで氷ってしまいます。それに伴いコクガンは野付崎の沖に集まります。この時期は湾内から氷が帯状になって流れ出します。これは湾内の奥に流れ込む当幌川の真水が氷ったものようです。コクガンはその流水のそばに集まって、出入りをしています。正確な個体数は遠くて数えることはできませんでしたが、300から800羽の群れがいました。

表1 コクガンの観察日と個体数

年	月日	天候	風力	野付崎	トドワラ	ナラワラ	観察個体数
2004	12.12	くもり		11:00-14:00			600+
	12.19	はれ	3	11:00-13:30			100+
	12.23	くもり		12:30-14:30			300+
	12.26			12:00-14:00			1,300+
2005	01.02	はれ		11:00-13:30			30+
	01.10	はれ	3	11:00-13:30			6
	01.16	くもり		10:30-12:10			30(沖群れ+)
	01.23	はれ	4	11:00-13:30			25(沖群れ+)
	01.30	くもり/はれ	3	11:30-14:00			20(沖群れ+)
	02.06	はれ/くもり		12:00-13:30			3(沖群れ+)
	02.13	はれ/くもり	0	11:00-13:00			13(沖群れ+)
	02.27	はれ	0	12:00-13:30			0

年	月日	天候	風力	野付崎	トドワラ	ナラワラ	観察個体数
2005	03.13	はれ		11:30-14:00			200+
	03.27	はれ	1	11:00-14:00			235
	04.10	はれ/くもり		10:00-12:00	13:00-14:00		200 (1,000+)
	04.17			11:00-13:00			39
	04.24			09:00-11:00	12:00-13:00		199 (2,000+)
	04.29	はれ	1	10:15-11:30	12:00-13:15		186 (1,000+)
	05.01			12:15-14:00			156 (1,000+)
	05.03	はれ		11:00-12:15	12:45-13:30		154 (+)
	05.05	はれ		06:45-08:00	08:30-09:30		41 (+)
	05.08	はれ		10:45-12:30			120 (+)
	05.14	はれ			17:10-18:30		60 (+)
	05.21				17:30-19:00		0
	05.28	きり	3		17:30-19:20		0
	06.04				16:40-19:00		5
	06.12			08:00-10:00			0
	07.02			08:30-10:30			0
	07.31			10:00-12:00			0
	08.14	くもり					0
	08.21						0
	08.28						0
	09.25						0
	10.02			12:10-14:00			0
	10.10			15:10-16:30			20
	10.16	はれ			10:05- -	- -13:35	1,289 (+)
	10.23	あめ	4	11:00- -	- - -	- -12:15	100+
	10.30	くもり		13:00- -	- - -	- -14:30	3
	11.03	はれ		13:00- -	- - -	- -15:00	0
	11.13	はれ	4	10:00-11:40			77
	11.23	はれ	0	15:00-16:30			71
	11.27			12:40-15:00			14
	12.04	はれ	4	11:50-13:35	14:15-15:15		1,336
	12.11	くもり		12:10-14:30			186
	12.23	くもり	4	11:00-12:50	13:30-15:00		941 (1,000+)
	12.25	はれ	2	10:00-12:00			575
2006	01.01	はれ	3	11:20-14:30			337
	01.08	はれ	2	11:00-13:20			83 (沖群れ+)
	01.22	はれ	0	11:00-13:00			35 (沖群れ500+)
	01.29	はれ	3	11:00-12:30			31 (沖群れ+)
	02.05	はれ	3	11:00-13:00			98 (沖群れ+)
	02.10	はれ	1	11:00-13:30			39 (沖群れ800+)
	02.26	くもり	1	10:00-15:30			318
	03.05	くもり	1	11:00-14:00			226 (200+)
	03.26	くもり	3	10:15-12:35	13:00-14:30		867 (+)
	04.02	はれ	3	12:15-14:00	10:15-12:00		4,605
	04.09	くもり	1	13:40-15:30	11:00-13:00		1,338
	04.30	くもり	1			10:30-13:30	8,600+
	05.04	はれ	1	12:30-14:30	09:50-12:00		4,282
	05.07	はれ	1	11:00-12:30	10:00-10:40		147

【観察個体数の表示例】 600+ : 600羽まではカウントしたが、それより多い。(沖群れ+) : 沖合いに群れがいるのはわかるが、個体数はわからない。(沖群れ800+) : 沖合いに群れがいて、800羽まではカウントできるが、それ以上はわからない。(2,000+) : カウントした以外に湾内に2,000羽以上の群れがいる。(+) : カウントした以外に湾内に群れがいるが、数ははっきりしない。

[2月下旬から3月中旬] 湾内の氷が2月20日を過ぎるととどろんと融けだします。2分の1ほど融ける頃から野付湾に200から400羽の群れが集まっていました。

[3月下旬から5月] 4月に入ると氷はほとんど融けてしまいます。3月の下旬からコクガンの個体数が増えます。野付湾東域に集まっていた群れがナラワラとトドワラ付近の浅瀬に集まり、休息しています。4月に入ると群れは4,000羽以上に膨れてきました。ピークは4月20日ごろから5月5日まで、10日を過ぎるとほとんどいなくなりました。終認は6月4日竜神湾にいた5羽でした。

野付湾内外での入って来るコースと出て行くコース

コクガンは湾内を利用しながら外海に出て行き、また入って来る行動をとっています。どこに何をしに行くのかは確認できていません。ただ根室側(たぶん風蓮湖方面)と国後島側(ケラムイ岬方面)の2つの方向がありました。

入って来てどこかに着水するコースには7つのパターンがあります(図4-1)。

- E 1 コース：国後島方面から野付半島に沿って飛んできて野付崎の浅瀬に降りる。
- E 2 コース：同上コースを飛んできて野付崎の先端を回り、奥の野付湾に降りる。
- E 3 コース：E 1 コースをとってさらに奥の竜神湾に降りる。
- E 4 コース：E 2 コースを経てトドワラ付近に降りる。
- E 5 コース：E 2 コースを経てナラワラ付近に降りる。
- E 6 コース：国後島方向から飛んできて野付崎の沖に降りる。
- E 7 コース：根室方向から飛んできて野付湾に降りる。コクガンはこのようにきちんとしたコースを取っており、観察がとてもしやすいです。

つぎに、出て行くコースには7つのパターンがありました(図4-2)。

- D 1 コース：野付崎の先を回って野付半島に沿いながら国後島方向に飛んでいく。
- D 2 コース：同上コースをとって択捉島方向に飛んでいく。
- D 3 コース：同上コースから風蓮湖方向に飛んでいく。
- D 4 コース：野付崎の沖から国後島方向に飛んでいく。
- D 5 コース：トドワラから野付半島を横切って択捉島、根室方向に飛んでいく。
- D 6 コース：竜神湾から野付半島を横切って国後島方向に飛んでいく。
- D 7 コース：ナラワラ、トドワラから野付半島を横切って国後島、択捉島方向に飛んでいく。

それぞれのコース取りは湾内の結氷と大きな関係がありました。

[秋の飛来期から湾内が結氷するまで]

コクガンは1羽から5羽の群れ単位が合流し群れを作り、出入りをしています。この時期は野付崎を回って入って来

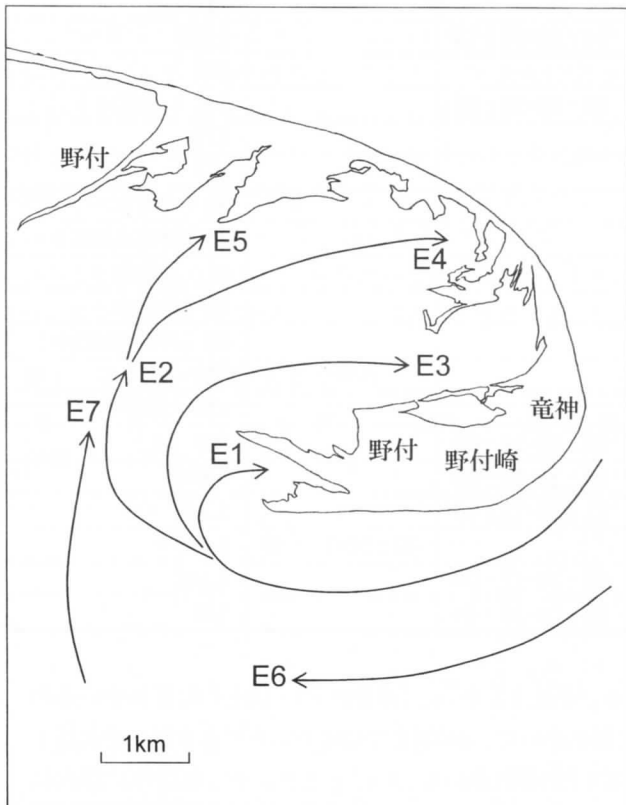


図4-1 コクガンが湾内に入ってくるコース

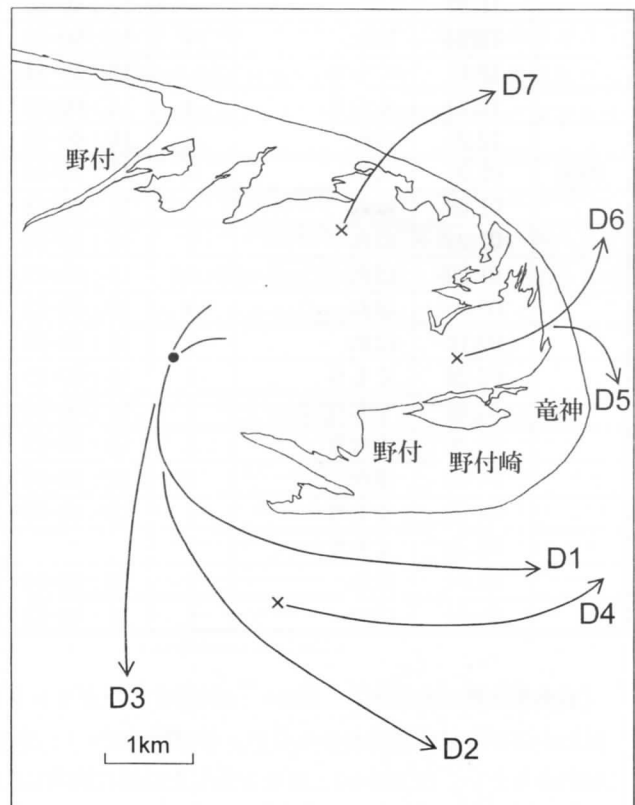


図4-2 コクガンが湾内から出て行くコース

るE1、E2、E3のコースとその逆となるD1、D3を取って出て行くコースがほとんどでした。1度だけ400+羽の群れが外海から野付半島を横切ってナラワラの浅瀬に入ってきたことがありました。

[湾内結氷期]

この時期湾内に来ず、野付崎の沖を利用するE6とD4のコースを取っていました。

[氷融け期]

波と風の影響が少ない湾内の海面が開きだすとすぐに沖から戻ってきます。出入りは野付崎を回るE2とD1を取っていました。

[3月下旬から5月の渡去まで]

湾内の氷がなくなると個体数が増え、出入りが活発になります。4月10日頃からそれまで野付崎を回って外海に出て行った群れがトドワラや竜神湾から野付半島を直接横切って外海に出て行くことが多くなります。また、入ってくる群れは2羽から14羽の小群になりそのほとんどが野付崎を経由してくるE3、E4、E5のコースがほとんどでした。たまに外海から直接トドワラ付近に入ってくる群れがいました。そのときはどの群れも200羽以上でした。また根室方面から入ってくる群れが目付きました。

まとめ

コクガンが秋に野付湾に渡ってきて11月頃まで休息し、それから姿を消し、3月から4月にまた姿を現し、繁殖地に渡って行くことが以前から観察されていました(雁を保護する会 1994)しかし、越冬することに関しては情報がありませんでした。

2005年10月10日は記録としては日本でもっとも早いものになります。ロシアのカムチャッカ半島のマリヤムヴァムとジュパノワの潟湖では9月末から12月初めまで5,000羽のコクガンが休息しているとのことです(Andreev 1997)。この群れは千島沿岸で越冬すると考えられています。日本で越冬する群れがこれより少し遅れて渡ってきて12月下旬まで休息し、越冬地へ向かうと考えることはとても自然です。10月16日に1,289羽以上の群れが渡来し、12月下旬まで1,000羽以上の群れが休息していると思えます。10月下旬から11月下旬まで100羽前後しか観察されなかったのは、10月25日から鹿猟と鴨猟が解禁になった影響があります。その間どこにいたかは分かりませんでした。

湾内が3分の2以上氷る1月から2月中旬には500から1,000羽の群れが野付崎の沖に越冬していました。この群れは国後島の方向に飛んで行き、またやって来る行動が観察されました。16kmほどの距離に国後島のケラムイ岬があり、このあたりは水深が0.8~2.0mの浅瀬があります。流水が接岸しにくい場所で、コクガンがこの海域を餌場として利用している可能性が考えられます。もしかするとここ



飛翔するコクガン 05. 12. 23 岩井直樹氏撮影

があるから野付半島付近で越冬できるということが示唆されます。猟期にケラムイ岬の付近にコクガンが避難していると考え、ハンターの姿が見られなくなる12月に再び1,000羽を越す群れが現れることが理解できます。

3月下旬になると個体数が増えだします。各地で越冬していた群れが集まってきているようです。それはほとんどの群れが根室、風蓮湖方面から来るからです。これは3月に浜中町霧多布で120羽の群れが観察されていることから太平洋沿岸を北上してきた群れが休息するために集まってきていると思われます。

4月に入るとコクガンの数は4,000羽以上になり、4月下旬から5月上旬にピークに達します。ほとんどがナラワラとトドワラ付近のアマモが密生している浅瀬に集まって休息しています。5月8日頃までに群れのほとんどが渡去してしまいます。ヤクーツクのレナ川流域(北緯62°:サハ共和国)では5月20-30日に現れ、渡りのピークが5月26日になり、北緯70°付近では6月2日頃がピークとのことです(Andreev 1997)。このことから西太平洋回廊ルートをとる個体群が北上しながら渡りの時期を調節する休息地として、また日本各地で越冬していた群れの集落地として野付湾は重要な場所であることが伺えます。また越冬地としても個体数の多さから大きな役割を持つ地域だと思います。

最後に素人のオッサンが立ち入り禁止の野付崎に入るのに快く許可をしていただいた別海町役場の観光課の方に感謝申し上げます。

参考資料

- 雁を保護する会. 1994. ガン類渡来地目録第1版(宮林泰彦編)
- Andreev, A. V. 1997. Monitoring of geese in northern Asia. Species diversity and population status of waterside birds in Northern-East Asia. (日本語訳: 北アジアのガン類のモニタリング. 極東の鳥類16. 極東鳥類研究会. 1999)



千歳川探鳥会

2006. 5. 14

札幌市中央区
白澤 昌彦

最近、晴天が続いており、探鳥会当日の天気予報は雨のち晴れということで、気掛かりではあったが、晴れるのではとの一縷の望みで朝を迎えた。予報は当たり、家を出る時からもう雨が降っている。千歳川では余り雨に当たったことがないので、どのくらい鳥が出てくれるのか心配であった。

この雨の中でも結構な数の人が集まっていた。気温は5℃程度と寒く、雨も皆さんが傘を差して歩くほどの雨。いつも集合場所に着いた時に聞こえるクロツグミの声も聞こえない。気温が低いせいか鳥の動きが悪いようだ。この場所に来たらこの鳥が囀っていてというパターンがなく、矢張りいつもより寂しい。しかし、当会の探鳥会で、ほとんどここでしか見られないヤマセミはしっかり見ることができた。ダムサイトについても雨はやまなため、朝食を摂るのをやめて、戻ることとする。サケ孵化場の展示室も到着した時間が早すぎてまだゲートさえ開いていないため、来た道に戻る。帰り際に橋の上で再びヤマセミが見られたのは、千歳川探鳥会ならではの最後の幕でした。確認された鳥は、例年より10種ほど少ない結果でした。

【記録された鳥】アオサギ、マガモ、キンクロハジロ、キジバト、ツツドリ、ヤマセミ、カワセミ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、イワツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ミソサザイ、トラツグミ、クロツグミ、アカハラ、ヤブサメ、ウグイス、エゾムシクイ、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、コサメビタキ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、アオジ、カワラヒワ、イカル、ニュウナイスズメ、ハシブトガラス 以上 37種

【参加者】阿部真美、板田孝弘、今村浩史、岩崎孝博、大野信明、川村宣子、栗林宏三、小山久一、齊藤由美子、島田陽子、清水朋子、白澤昌彦、高田征男、高橋利道、田中洋・雅子、松原寛直・敏子、濱野由美子、山田良造、吉田慶子、渡辺好子 以上 22名

【担当幹事】栗林宏三、白澤昌彦

野幌森林公園探鳥会

2006. 5. 21

【記録された鳥】カイツブリ、トビ、キジバト、カッコウ、ツツドリ、コゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、コマドリ、トラ

ツグミ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、コサメビタキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、イカル、ニュウナイスズメ、カケス、ハシブトガラス 以上 31種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、今井 登、今村三枝子、岩崎孝博、牛込直人、香川 稔、勝見輝夫・真知子、蒲澤鉄太郎、河野美智子、河端正晴・満寿美、川村宣子、後藤義民、小西美美枝、小村明彦、小山久一、今野 弘、斎藤和之、斎藤正雄、佐野千津子、島田陽子、白澤昌彦・瑠美子、須田 節、高田征男、田中 洋・雅子、徳田恵美・和美、戸津高保・以知子、中正憲信・弘子、成澤里美、芳賀征子、早坂泰夫、原 美保、辺見敦子、堀 さち子、松原寛直・敏子、山田良造、三浦、安 真一郎 以上 47名

【担当幹事】後藤義民、中正憲信

鶴川河口探鳥会

2006. 5. 28

風雨が強く探鳥は困難な状態でした。少人数が来ましたが、人工干潟まで様子を見にいっただけで、探鳥会記録として残すまでには至りませんでした。

【担当幹事】北山政人、樋口孝城

植苗ウトナイ探鳥会

2006. 6. 4 札幌市厚別区 小山 久一

植苗・ウトナイ（以下、植苗）探鳥会は植苗駅に集合し、9時10分に始まる。いつも集合時間の10分が端数に感じてその意味が気になっていた。当日、私は集合時間の少し前に到着したので駅舎の近くで待っていた。すると、「カンカンカン・・・」という警報音とともに「まもなく列車が入ってきます」のアナウンスが晴れた無人のホームに響き渡った。到着した列車からは見覚えのある会員が数名降り



コヨシキリ

てきた。すでに集まっていた会員に、列車の会員が加わるとすぐに、当番幹事さんの挨拶が始まった。なるほど、や々と理解できた。集合時間9時10分は列車で参加する会員の到着時間に合わせてあったのである。

植苗探鳥会の楽しみはシマアオジである。最初に見たときの胸の黄金色の輝きは忘れることができない。確かそのとき、私は思わず「きれいな黄色だ」といってしまった。それを近くで聞いた人が「黄色ではない黄金色だ」といさめるように教えてくれたのをいまでも覚えている。シマアオジの胸が黄色ではなく黄金色だからこそ、多くの人を魅了するのであろうと思われる。今回の探鳥会では残念なことに(予期した通りではあったが)、昨年に引き続きシマアオジを見ることはできなかった。

実は、この探鳥会で私を大変うれしくさせた鳥がいた。それはウグイスである。特に注目を集める鳥ではないが、姿を探るのが大変な鳥である。私は、響き渡る鳴き声は聞こえるのになかなか姿を見せてくれないウグイスにいつもイライラさせられていた。しかし、今回は大きく開く嘴の動きと鳴き声が一致するのをはっきりと確認できたのである。これは大収穫で、長年の姿無きウグイスに対する腹立たしさをいっぺんに解消することができた。

確かにシマアオジは植苗探鳥会の最大の魅力である。しかし、広い草原を甲高く囀るノビタキやコヨシキリをじっくりと観察するのもまた楽しいものである。最後に当番幹事さんに感謝であります。

【記録された鳥】アオサギ、トビ、オジロワシ、マガモ、オオジシギ、カッコウ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ノゴマ、ノビタキ、クロツグミ、ウグイス、エゾセンニュウ、マキノセンニュウ、コヨシキリ、センダイムシクイ、キビタキ、シジュウカラ、メジロ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、イカル、コムクドリ、ハシボソガラス

以上 27種

【参加者】赤沼礼子、泉谷宣志、今村三枝子、岩崎孝博、蒲澤鉄太郎、河野美智子、川村宣子、小堀煌治、小山久一、品川睦生、高橋利道、高橋良直・美奈子、手間本芳博、徳田恵美・和美、戸津高保・以知子、富永繁幸、富永マサエ、中正憲徳・弘子、原 美保、樋口孝城、堀 さち子、山田良造、山本和昭、山本昌子、吉田慶子、鷲田善幸、渡辺好子

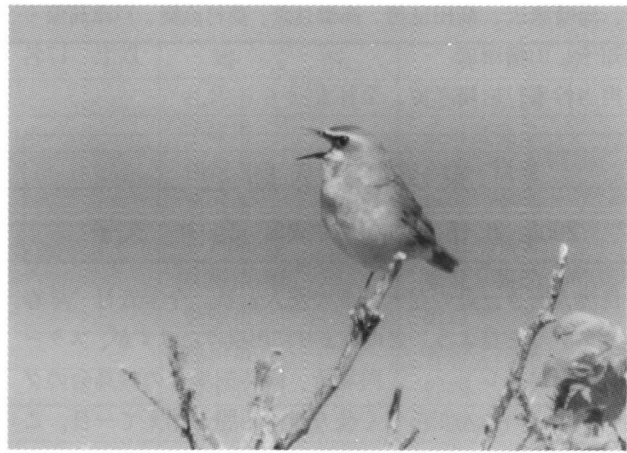
以上 31名

【担当幹事】戸津高保、樋口孝城

平和の滝探鳥会

2006. 6. 10 函館市 菊池るり子

夜の探鳥会に初めて参加させていただきました。平和の滝に集合したときはまだまだ明かるい空の色で、繁りはじめた草木を眺めながらお寺の横から歩き始めました。ゆる



ノゴマ

い登りの1本道をずっと歩いていく途中にはタチカメバソウ、マムシグサ、ナンブソウ、ルイヨウショウマなどの植物を観察できました。途中ではシジュウカラやヒヨドリ、アオジ、ウグイスの声や姿を確認できました。30分以上も歩いたでしょうか、送電線下の広場に到着してそれぞれ腰を下ろし、鳥の声を待つことになりました。はじめのうちはヤブサメの声は聞こえましたが、しばらく待っても川の流る音が聞こえるだけで、鳥の気配はなく、友人としばしおしゃべりしていましたが、「鳴いてる！」という声に耳を澄ますと、キョキョキョとヨタカの声がしました。しばらくすると又遠くでかすかに声がかすかして、コノハズクの声だということでした。このうっそうとした森のどこかに声の仏法僧と言われる、私はまだ見たことのない鳥がいて、その声が聞いたことに感動しました。その日は曇り空でしたが、晴れていたならきっと星もきれいに見えて、星座をよく観察できるだろうと思われました。

夜8時を過ぎて戻ることになり、すっかり暗くなった道をライトで足元を照らしながら歩き出しました。そろそろお寺が近づいてきた頃に割と近くでホーホーと声がかすかした、アオバズクだそうです。これはしばらく聞こえていて、時間があればずっと聞いていたいところでした。

日中に手稲山中腹をシラネアオイを楽しみながら散策した時には、エゾムシクイ、エゾセンニュウ、センダイムシクイ、ウグイス等の声が聞けましたが、夜には個人ではなかなか来られない場所で、フクロウの仲間の声が聞けて、嬉しい1日を手稲山で過ごすことができました。いつかは声だけでなく夜行性の鳥達の姿も見たいと思いながら手稲山を後にしました。

案内をして下さった幹事の皆様、有難うございました。

【記録された鳥】ツツドリ、コノハズク、アオバズク、ヨタカ、ヒヨドリ、ヤブサメ、ウグイス、シジュウカラ、アオジ、ハシボソガラス

以上 10種

【参加者】石神美代子、岩崎孝博、亀田容子、菊池るり子、櫛引厚子、栗林宏三、佐賀テエ子、坂本 綾・しずく・大

吉、島崎康広、高田征男、高橋良直、高村直樹、戸津高保・以知子、山崎康広 以上 17名
【担当幹事】岩崎孝博、栗林宏三

東米里探鳥会

2006. 6. 18 札幌市中央区 吉中 久子

自然大好き、野の花大好きの友人と私。今年五月“早春のカタクリを見よう”との集まりに出掛けたはずが、スタートして、アレレ・・・。同場所、同時刻集合の探鳥会のグループに迷いこんだらしく仕方無く、胆を据えて一日。これがソコツ者の私の鳥との出会いでした。

何と不思議なご縁でしょう。そしてその時見たイカルの美しかったこと。渡りで消耗していたか声も無く、10分以上も枝に止ったまま、その姿を誇らし気(?)に見せ続けてくれたのです。後にしてその美声に、又々魅せられすっかりとりこに・・・。

野、山、花、星、風みんな大好き、そして人間も。その中に今、鳥が大きく私の中に入り込んできました。いわゆる“ハマった”のです。

鳥は私の自然感に広がり厚みをくれました。大げさですが、共に地球に生きるものとして、謙虚に永くおつき合いをしていきたいと思っています。そして私の2006年は探鳥元年です。

【記録された鳥】アオサギ、トビ、ハイタカ、キジ、キジバト、カッコウ、アリスイ、アカゲラ、ヒバリ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ノビタキ、エゾセンニュウ、コヨシキリ、オオヨシキリ、ホオアカ、アオジ、カワラヒワ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上 24種

【参加者】阿部真美、岩崎孝博、品川睦生、島田芳郎・陽子、高橋利道、田中 洋・雅子、戸津高保、富樫啓一、浜野チエ子、濱野由美子、早坂泰夫、松原寛直・敏子、村上茂夫、山崎康広、吉中久子 以上 18名

【担当幹事】品川睦生、戸津高保

野幌森林公園探鳥会

2006. 6. 25

【記録された鳥】カイツブリ、トビ、キジバト、コゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、コサメビタキ、ハシブトガラス、ヒガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、キバシリ、アオジ、ニュウナイスズメ、ハシブトガラス 以上 20種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、今村三枝子、岩崎孝博、牛込直人、大野信明、勝見輝夫・真知子、小泉三雄、後藤義民、齊藤和之、品川睦生、田中 洋・雅子、辻田、戸津

高保、成澤里美、野田栄子、信田洋子、畑 正輔、浜野チエ子、濱野由美子、早坂泰夫、原 美保、平野規子、広木朋子、堀 さち子、松原寛直・敏子、山田博之、山口和夫、山本和昭、山本昌子、吉中久子 以上 34名
【担当幹事】早坂泰夫、山口和夫

福移探鳥会

2006. 7. 2 札幌市東区 今 英紀

妻の友人は、「このままでは人間がだめになってしまう」とデスクに向かう仕事私の私に、7月2日の福移探鳥会を誘った。当日は、雲一つない晴天に恵まれ気温も上昇。おかげさまで、もやしの私が少し日焼けしました。(妻は日焼けするとしっかり残るのですが、私はすぐとれて、もやしになってしまいます)

福移の観察会は毎年天気がいい(事務局の人のおこないがいいからと自慢げ)との挨拶のあといざ出発。2、3歩くと「かわいい鳥がいる」と三脚にかけた望遠鏡でキャッチ。私の双眼鏡でもとらえることができました。しかし、「かわいい」と言っても姿はわかりますが、肉眼で見ると様相は変わらず。望遠鏡にはみんなが集まってレンズをのぞいています。

私も見てみると私の双眼鏡とは大違いの鳥がいます。鳥の顔、目、黄色や赤など色のはっきりわかるのが双眼鏡とは大ちがい。鮮やかに鳥の姿を写し出しています。

まわりの参加者のみなさんは、次から次へと鳥の名前を言いますが、私には覚えるすべもなく、ただ頭の中を通り過ぎていきます。

でも、今年も確認できた鳥がいることに環境保護の大切さを感じます。

働けど働けどなお暮らし良くならざる世の中ですが、苦しみに負けない生きる力を得るために、いのちの洗濯をさせていただきました。ありがとうございます。

【記録された鳥】アオサギ、トビ、マガモ、キジ、キジバ



ベニマシコ

ト、カッコウ、アリスイ、アカゲラ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ノゴマ、ノビタキ、クロツグミ、アカハラ、ウグイス、エゾセンニュウ、シマセンニュウ、コヨシキリ、オオヨシキリ、キビタキ、シジュウカラ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 以上 35種

【参加者】阿部真美、五十嵐加代子、板田孝弘、今村三枝子、岩崎孝博、蒲澤鉄太郎、刈部栄一、栗林 宏三、小堀煌治、今 英紀・光江、品川睦生、白澤昌彦・瑠美子、高田征男、高橋利通、高橋良直、田中 洋・雅子、手間本芳博・拓也、道場 優・信子、徳田恵美、戸津高保・以知子、成澤里美、畑 正輔、原 美保、橋爪陽子、樋口孝城、平野規子、広木朋子、松原寛直、安 真一郎、柳川 巖、山口和夫、山崎康広、山田良造、山本和昭、横山加奈子、吉田慶子 以上 42名

【担当幹事】岩崎孝博、道場 優

野幌森林公園探鳥会

2006. 7. 9

【記録された鳥】トビ、マガモ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、アオジ、カワラヒワ、イカル、ハシブトガラス 以上 21種

【参加者】阿部記明・芳子、井上公雄、かずたまゆみ・なおゆき、小西美美枝、小堀煌治、後藤義民、斉藤正雄、佐々木悦正、佐藤美栄子、品川睦生、高橋利道、戸津高保、長尾由美子、成澤里美、畑 正輔、浜野チエ子、真壁スズ子、松原直寛、矢富いづみ、吉中久子 以上 23名

【担当幹事】成澤里美、横山加奈子

【閑話】 野鳥あれこれ カタカナで聞く鳥の声

ある鳥の鳴き声について、手許の3冊の野鳥図鑑(それぞれをA、B、Cとします)に書かれているものを次に書きます。

- A. グワックルル
- B. グワグワー、ゴッゴワー
- C. ピョピッピーーッ、クルルル

これは何という鳥の声を表したものでしょうか。まだ先の方は読まないで下さい。名前にはよく知られていますが、実際に姿を見たり、声を聞いたりしたことがある人はそれほど多くはないと思います。この地味な鳥も最近はかなり少なくなったようです。

AとBは「グワ」が、AとCは「クルル」が共通しています。でも、BとCとは同じ鳥とはとても思われません。Aは「フィールドガイド日本の野鳥」(日本野鳥の会)、Bは「日本の野鳥590」(平凡社)、Cは「日本の野鳥550 山野の鳥」(文一総合出版)で、それぞれ名のある人の手によるものです。同じ鳥の声を聞いても、それをカタカナで表すと随分違いますね。いや、その前に、そもそも人によって聞こえ方が違うのでしょうか。たとえばカワラヒワの典型的な声でさえも、口で言ってもらうと、人により「ピーン」、「ビューーン」、「ジーン」、「ジュイー」など様々です。ましてそれをカタカナで表すと(実はもうカタカナで書いているのですが)余計違いが大きくなります。

さてはじめの鳥は何でしょうか。古い世代(?)の人

は「アジャパー」と鳴くと言います。そもそも「アジャパー」が何たるかを知らない世代の人は、エッ?というだけです。「アジャパー」はいわゆる聞きなしというほどのものではなく、確かにそのようにも聞こえます。ちょっとふざけた人は「ウジュラーッ」と鳴くと言います。もう何でもありです。ということで、この鳥はウズラなのですが、ウズラに限らず、ほんの短い鳴き声でさえも本当はどうなのか悩むことがしばしばです。いや、みんなに共通した「本当」はなく、人それぞれの「本当」があるのでしょうか。

ついでにちょっとクイズもどきを。これまた上記3つの図鑑による、ある鳥の鳴き声です。実際はこれよりもずっと長く、聞いている方が疲れるほど長くさえありません。

- A. ジョッピーリリ ジョッピーリリ ギョッキョキリキリチリリ
- B. ジッピーリリ ジッピーリリチリチリ チュチュ ピピピ
- C. キリキリピッ ギョシ キョリリピリリリ

何となくわかりそうですね。この号のどこかにこの鳥の写真が載っています。来年の春、草原でこの鳥の声を聞いたなら、みんなで「鳥あわせ」ならぬ「声あわせ」を試してみるのも一興ですね。

広 報 部



【野幌森林公園】

2006年10月1日(日)、10月15日(日)、
11月5日(日)、12月3日(日)

初秋から晩秋の野幌森林公園を楽しみます。夏鳥たちはほとんど渡去し、カラ類やキツツキ類などの留鳥

が主体となりますが、初冬といってもいい12月初めにはツグミやマヒワなどの冬鳥も見られます。晩秋の頃から木々の葉も落ち、探鳥コースを覆い尽くすようになります。歩くたびに落ちた枯葉がガサガサと音をたてますが、鳥は見やすくなります。木の実を食べるエゾリスの愛らしい姿も見られるかもしれません。

集合=野幌森林公園大沢口 午前9時

交通=新札幌駅ターミナル発

夕鉄バス(文京通西行)大沢口入り口下車

JRバス(文京台循環線)文京台南町下車

各徒歩5分

【宮島沼】 2006年10月8日(日)

宮島沼は、ユーラシア大陸の北東地域で繁殖を終えて夏を過ごしたマガンの秋の渡りの中継地として重要な場所です。例年9月下旬頃から渡来が始まり、この時期にピークを迎えます。春の渡り時期に比べて、宮島沼での滞在期間は短く、また群れも大きくはなりません、それでも2万羽から3万羽になります。マガンの他にも、ハクチョウ類、カモ類、カイツブリ類なども見られます。少数ですがシギ類も見られることがあります。時として猛禽類が上空を飛び、水面の鳥たちが一斉にざわめくのも見ものの一つです。

集合=湖畔 午前10時

交通=岩見沢駅前ターミナル発又はJR石狩月形駅前発

中央バス(月形行又は岩見沢行)

大富農協前下車 徒歩10分

【ウトナイ湖】 2006年11月12日(日)

冬を間近にし、湖面にはこれから南へ向かったり、近郊で越冬するハクチョウ類、オナガガモ、ヒドリガモ、カワアイサなどのカモ類が浮かんでいます。マガンやヒシクイも見られます。オジロワシが対岸の木にとまっているかもしれません。湖岸をサンクチュアリのセンターまで歩きます。途中の林では渡り途中の小鳥たちが見られることもあります。

集合=鳥獣保護センター前 午前9時30分

交通=千歳空港発道南バス苫小牧行

ウトナイ湖下車 徒歩1分

鳥民だより

【新しく会員になられた方】

- 水野 嗣子 札幌市豊平区
- 大表 順子 札幌市南区
- 芳賀 征子 札幌市清田区
- 牛込 直人 江別市
- 小畑 淳毅 旭川市
- 村上 茂夫 札幌市西区
- 手間本芳博・由美子・雄介・拓也 岩見沢市
- 石 弘之 札幌市北区
- 吉中 久子 札幌市中央区
- 浜野チエ子 札幌市白石区

◆野鳥カレンダーの販売◆

今年も「北海道野鳥愛護会」の名前の入ったカレンダーを販売いたします。印刷予定部数は70部で、価格は1,200円です。早めにお申し込みください。

お渡しは11月のウトナイ湖探鳥会と、12月の野幌探鳥会になりますので、必ずお受け取りください。申し込み時に受け取り場所もお知らせください。

- 申し込み先 戸津 011-831-8636 (FAXも同じ)
- 小堀 011-591-2836 (FAXも同じ)

◆山田良造さん「北海道の野鳥写真」を出版◆

会員で元幹事の山田良造さんが野鳥の写真集「北海道の野鳥写真」(A6版、287P)を出版した。これまで撮りためた300種類の中から自信作281種類を選び収録している。1975年から撮影をはじめ、30年間の集大成。「一枚の写真は数枚の原稿に勝る」が山田さんのモットー、「珍鳥現れる」と聞けば何処へでも出かける山田さんなので、撮影ぶりを目にした会員も多いはず。その情熱と集中力には皆、圧倒される。300種類撮影というのも驚きだが、山田さんは数少ないフィルム派、写真は色も自然、ピントも良く周りの環境も写し込まれているので居ながらにして探鳥気分が味わえる。定価は2,500円で申し込みは山田さん。

Tel 011-855-8414

会員大募集!!

目標 500名 キャンペーン実施中

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465

HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>